

平成26年度霞ヶ浦学講座 第10講 結果報告（要旨）

実施日時：平成26年12月7日（日）13:30-15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター2F会議室

講師：沼澤 篤（霞ヶ浦環境科学センター嘱託） 参加者数：33名

テーマ：「霞ヶ浦の生物多様性（棲み分ける生物たち）」

要旨：国連環境開発会議（1992年）を契機として生物多様性条約が発効し、日本は生物多様性国家戦略を策定し、2008年に生物多様性基本法を施行しました。その理念は、「生物多様性の保全と持続可能な利用を総合的、計画的に推進することで、豊かな生物多様性を保全し、その恵みを将来にわたり享受できる自然と共生する社会を実現すること」にあります。同法では、地方公共団体が地域戦略を策定するように定めています。

茨城県では、「茨城の生物多様性地域戦略」を策定中です。その中では、県民が生物多様性の重要性について認識を深め、実際に生物多様性を保全できる体制作りなどが上げられています。また、茨城県は河川、湖沼、湿地が多いことから、水辺の生態系の保全、水質浄化、水産業の発展、親水域の整備などが具体的課題となっています。

湖沼は生物多様性が豊かですが、外部からの攪乱に弱い特性があります。霞ヶ浦は生物多様性について認識を深める上で、最適なフィールドです。生物多様性には3つのレベルの多様性があります。（1）生態系の多様性（2）種の多様性（3）種内における遺伝的多様性です。霞ヶ浦の生物多様性に影響する要因は（1）地史、地形的要因（2）歴史的要因（3）開発による影響（4）水質悪化の影響、（5）塩分濃度（6）外来生物の影響などが考えられます。こうした複数要因が霞ヶ浦の生態系を豊かにしたり貧弱にしたりしていますから、具体例について丁寧に関係性を調べていくことが重要です。

霞ヶ浦では15種類のハゼ類が記録されています。ハゼ類は食性、行動、形態などから多様に種分化し、各ニッチ（生態学的地位）に棲み分けています。それは霞ヶ浦という潟湖の生態系の豊かさを反映しています。

霞ヶ浦でタナゴ類は外来種をふくめて7種類が記録されています。タナゴ類は二枚貝類に産卵する習性があり、種分化の多様性が注目されています。しかし二枚貝の生息環境が悪化しており、タナゴ類への影響が大きくなっています。

霞ヶ浦湖水と周辺湿地（アシ原、水田、ハス田など）では、多様な水鳥が、生態系の多様さに応じて棲み分けています。カモ類やカイツブリ類は採餌する場所の水深、食物の種類、繁殖する場所などに応じて種分化しています。サギ類は、餌資源や生息場所に応じて種分化しています。

霞ヶ浦の水生植物は、水辺環境の多様性に応じて種分化しています。沈水植物、浮葉植物、抽水植物という典型的な分類のほか、アシ群落内とその周辺植物の多様性、水辺のタデ科イヌタデ属の形態や生育場所の多様性は生存戦略として特筆されます。

生物多様性保全では、外来種、希少種、固有種、絶滅、地球温暖化と気候変動、開発圧力などがキーワードになり、難しい課題ですが、多面的に検討していくことが重要です。